

Q1 人はどのように集めましたか？

●つしま子ども食堂 代表:谷口 雅子さん



発起人の4人で打合せをした後で、つしま子ども食堂のFacebookを立ち上げて、「子ども食堂をやります」とコメントしたら、すぐに「協力しますよ」という人が出てきました。はじめのきっかけもFacebookでしたが、その後も一番人が集まるのはFacebookです。

学童保育の仲間たちも参加してくれました。また、「しげんカフェ」の方は顔が広いので、打合せのたびに人を連れてきて、口コミで広がったのもあります。基本的に来る者拒まずなので、第2回の企画会議では、30代から70代の老若男女10名の方が集まりました。

皆さん仕事の都合があるので、スタッフが少ないこともあります。企画会議が少なくてもなんとかありますが、当日に人が足りないと大変なので、私の娘やスタッフの子どもたちに手伝ってもらうこともあります。中学生の男の子は、小さい子どもたちの面倒をよく見てくれるし、段取りを1回教えただけで、きちっとやってくれる子もいるし、子どもたちは本当によく動いてくれます。最近では頼まなくても自分で考えていろいろ動いてくれるようになり、なくてはならないスタッフの一員となっています。スタッフの中には、地域の民生委員さんに声をかけてくれる人もいます。

●つなぐ子ども食堂 代表:安藤 綾乃さん



活動を一緒に始めたママ友メンバーが中心となって定例の打ち合わせを開き、メニューや活動の方針を決めています。そのメンバーが子ども食堂開催日に必ず集まるかという、そういうわけではありません。いろいろな参加の仕方があり、チラシの作成や配布など、前準備で力を発揮してくれるメンバーもいます。

チラシに「学生・おとなボランティア募集中」と載せることもあります。事前に参加確認はとっていません。当日「今日はもしかしたら私ひとりかもしれない」と不安になるときもありますが、思いのほかいろいろな方が手伝いに

来てくださいます。毎回参加してくれる受付や厨房のスタッフ、大学生や高校生、そして地域の人など。学生の皆さんも忙しいので、毎回必ず来てくれるとは限りませんが、入れ替わり立ち替わり手伝いに来てくれます。また、子どもと一緒に参加してくれた親も自分の子どもを見るだけではなく、手が空いていると「何かやりましょうか」と進んで手伝ってくれます。

長く続けるためには、無理のないペースでやるのが大切だと思います。「来られるときに来られる人が来てくれればいい」という感じで活動しています。

●子ども食堂 ふえりこ 医療法人さわらび会副理事長 社会福祉法人さわらび会専務理事:山本 ゆかりさん



まずは、コアなメンバーを固めてと考えていました。母体となるのが、開催場所のグループホームフジの職員と考へて、声をかけていきました。次に、食事を作るスタッフとして、第二さわらび荘の管理栄養士に声をかけました。

声かけは強制ではありませんから「子ども食堂をやるので、よかったですか」とお願いしていきました。皆さん快く来てくださいました。さわらび会には法人の中に栄養士会があり、そこにも協力をお願いしました。ひとりでは大変なので、管理栄養士、栄養士6名が交代で関わってくれています。

お母さんの職員も子どもを連れて参加しています。子ども食堂を開設するときには、学習支援やレクリエーションなどもやっていますので、英語教室ではオーストラリアの方がボランティアで参加してくれました。また、子ども食堂の広報のチラシに地域の方にもお手伝いいただけるようにボランティア募集も掲載しています。

そうしているうちに、地元の民生委員の方も関わってくれるようになりました。34名の方が関わってくださり、毎回10名以上の方が子ども食堂の活動に参加いただいています。

Q2 場所はどのように決めましたか？

はじめは「しげんカフェ」で開催していました。日曜日は午後5時までの営業なので、夜に子ども食堂を開催していました。でも「夜だと子どもがひとりで来られないよね」と話がでて、そうしたところ喫茶店のドレミカフェバンビーナの方から、日曜日の昼間は空いているので「使っていいよ」と言っていたので、日曜日の昼間に開催するようになりました。

そこでの開催が難しくなっていたところに、津島市のリノベーション事業で、縁側カフェ「えん」という喫茶店が開設されました。喫茶店の営業時間外に、地域のコミュニティスペースとして使えるので、今は、縁側カフェ「えん」がメインの開催

場所です。焼き芋と餅つきと、流しそうめんのときは、いくつかの小学校を使わせてもらっています。PTA会長をしていたスタッフが校長先生と顔見知りで、その方から直接話をしてもらっています。

あちこちの小学校でやるのは、地域の人たちに、子ども食堂のことを知ってほしいからです。私たち世代や私たちより上の世代と、今の子どもたちの置かれている環境はかなり違います。子ども食堂を通して、今の子どもたちが置かれている環境も知ってほしいですね。

学区のコミュニティセンターを使わせていただくことが多いです。開催したい学区を決めたら、まずは民生委員や区政協力委員の方などにご挨拶に伺います。学区の場所をお借りしますが、そこに来るのはその学区の子どもだけではありません。それを地域の方に理解していただく必要があります。また「どうせやるなら、継続してやってほしい」など、巡回型で開催している意味を理解していただくのが難しいときもあります。そのため、私たちの活動の主旨やこれまでの様子などを丁寧に話すようにしています。

そして、毎回ごはんのあとには「この町だいすき」という時

間を作っています。その学区の人の話を聞いたり、会場近くのお寺や公園に出かけたり、その町ならではの企画を考えます。その内容を決めるときも、学区の委員の皆さんなどに協力をお願いし、企画のヒントをいただいています。

区内を一回りするまでは毎回違う場所での開催なので、固定開催の会場探しとは違う難しさがあります。まずは、地域のいろいろな人にこの活動を知ってもらい、興味を持ってもらえるよう小さなつながりづくりを大切にしています。

福祉村の中にある第二さわらび荘は、広いですし、みんなの協力も得ることができますが、市の中心部から離れていますので、ここでは難しいと考えていました。たまたま、街の中にグループホームフジを建て、1階には地域に開いていけるような広いスペースも作ったので、そこでやるのがいいということになりました。

施設の近くには、新川小学校と松山小学校の二つの小学校があります。子どもたちが、歩いてくることのできる距離としてはちょうどよいので、この二つの校区の子どもたちを対象に開催していくことにしました。

子ども食堂を開催する前に、市役所に注意事項などを聞きに行き、保健所には衛生環境を見ていただくために、実際に来ていただきアドバイスをしてもらいました。

